



佳作

書評 本田由紀著 『軋む社会：教育・仕事・若者の現在』
(双風舎, 2008) (304/1444/H)

経営学研究科前期2年 田中 匠

これまでに色々な本を読んできて、私はどのような人の言葉に耳を傾けたいと思うのか、どのような人の言葉に心を動かされるのか、少しずつわかってきた。

自らの人生に揺るぎない使命感を持ち、それと格闘し続けている人の言葉である。そしてその人の格闘の度合いが強ければ強いほど、その叫びを聞いてみたくなるのだ。

本書は、教育社会学者である著者が、現代の若者を取り巻く「教育」「雇用」そして「家族」の状況をわかりやすくまとめた一冊である。著者によれば、今の日本を構成している社会はどこどころに歪みがあり、その負担が若い世代に集中して向けられているという。その状況は著者自身が本書の中で「社会の軋み」という言葉を用いて展開しているとおり、何かに圧迫された、息の詰まるような現実である。

本書を読むことで私たちは現代の若者が置かれているその苦境を容易に理解し、危機感を共有することができる。そして、「これは大変だ。何とかしなければならない」という同じような感想を抱くかもしれない。しかしせっかく本書を読んだ成果としては、それだけでは実にもったいないと思う。

私達は本書を読むことで、著者の使命と格闘する姿勢を感じ、手に入れなければならないのだ。

本全体からひしひしと伝わってくるが、著者はこの若者を苦しめる「社会の軋み」を憂い、それを取り除くことを自らの使命として研究しているのである。そしてそれが難しいということも認めてもいる。それでも尚諦めずに現状を改善するための具体案を模索し、本を通じて世に訴えかけているのだ。時折テレビ番組にも出演し、お笑い芸人との対談においても目を見開いてニート問題を語る。この姿勢を格闘と呼ばずして何と言えよう。

そして本書の最後の章を著者は、年長者として若者を取り巻く環境を変えてやれないことへの詫びと共に、「あなたのいる場所を、この国を、そして世界を、すこしでもましな方向に変えていこうとする静かで確かな動きに、あなたたちの力を貸してください」という言葉で終わっている。

私達が本書を読んで現状を確認するだけでは、変わらないのである。社会の軋みの犠牲になっている若者としての私たちは、そして社会を構成する一員としての私たちは、著者と同じ姿勢を身につけ、格闘する準備をしなければならないのだ。

学生という時期は自らの社会での立ち位置を決める最初の大きなチャンスである。この時期に社会に対する自らの使命を設定し、それを達成するにはどうすべきかを考え続けることは重要だ。これを多くの若者が考えることで、社会の軋みを様々な方面から少しずつ、解消していくための糸口が見つかる可能性が高くなるだろう。

そういう意味では、この本が大学の図書館に収められている意味は大きいといえるのではないだろうか。本書が多くの学生の目に止まり、社会の軋みと格闘する姿勢を身に付けた人物が増えることを期待せずにはいられない。